

社会福祉法人楽山会
権の実子供の家 地域交流スペース
令和5年度事業報告書

1 しいのみハウスの運営（2年目）

当法人の地域公益活動として、誰一人取り残さない地域子育てコミュニティをつくるために、日本財団の助成（開設・運営）を受けて、地域交流スペースに「しいのみハウス」を開設した（令和4年11月1日）。ここは、「みんなが、みんなの子どもを育てる社会」を目指して、多世代が交流しながら、子どもたちの生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」である。

当年度は、運営2年目に当たり、活動の充実を図った。活動の場を「しいのみハウス」だけでなく、新たに星の館（約70㎡）を活用して、音楽会や天文教室、読み聞かせ会などを開催した。また、近隣農地を活用して、野外活動の場に充て、野菜の栽培・収穫体験を実施した。

地域交流スペースと星の館については、地域の交流を促進するために、一般貸出を開始した。シェアキッチンを貸し出すことによって、週2日（木・金）のランチ提供が行われた。

2 目標と実績

子どもの好奇心や意欲を向上するような体験活動を子どもたちの意見を聞きながら日常的に計画し、実行しており、多様な体験の機会が提供できている。

近隣の学校、学童保育所、地域子どもクラブ、社会福祉協議会、行政機関、諸団体と幅広く連携してきた。子どもたちの利用が多数あるのは、広く保護者や地域住民に認知されたためと考えられる。子どもの居場所が保育所の園舎に併設されていることから、子育て家庭が安心感をもって、親子（未就学児）での利用も多い。

(1) 利用児童数

開設当初から、一日平均利用児童数15人を目標にしてきた。令和6年3月31日時点で、平均16人となっている。

令和4年度利用者数（登録児童数）	令和5年度利用者数（登録児童数）
未就学児 7人（21人）	3人（35人）
小学生 9人（59人）	12人（170人）
中学生	1人（3人）
計 16人（80人）	16人（208人）

小学校低学年の女児の利用が多い傾向にある。、子どもたちの活動グループでは、駄菓子屋部、畑部、美術部などが現在活動している。

(2) 参加者の状況

ア 活動プログラムの数、サービス提供の役割を持つようになった人（運営参画者）の数は着実に増えている。大学生・留学生や地域住民のボランティアの参加も定着している。登録者約26人、令和5年度末の実活動約11人。単なるお手伝いではなく、できるだけ企画・実行の役割をもって活動していただき、多世代・多文化交流機会を提供している。

イ 子どもに関する保護者からの相談件数は、37件あった。

ウ 参加者満足度は、75%以上を目標とした。参加者アンケート調査を令和6年3月～4月に実施したところ、次のような回答を得た。

- ・子どもたち（9人）の満足度： 大変満足 89%・普通 11%
- ・保護者（17人）の満足度： 大変満足 94%・やや不満 6%
- ・運営参画者（7人）の満足度： 大変満足 71%・満足 29%

3 活動の特徴

当法人運営の保育所、近隣小学校学童保育所、地域子どもクラブと連携をとり、乳幼児から小学生までの切れ目のない日常的、継続的支援の場として、子どもたちに多様な体験の機会を提供している。

(1) 多世代が交流する居場所

子どもたちが地域のボランティアなどの多世代と交流して、多様な体験をすることで、人と係わる力、好奇心、学習意欲、自己肯定感を高めることに寄与している。また、課題のある子どもの早期発見や見守りを行ってきた。

(2) 多文化との触れ合いの場

国際基督教大学、早稲田大学等の大学生やミドルベリー大学の留学生、地域住民ボランティアとの関係を構築し、多世代交流・多文化交流の機会を提供している。子どもの居場所での実習が国際基督教大学の授業として認定されるので、大学生・留学生が定期的に参加していることも子どもたちのよい刺激になっている。

(3) 地域の交流の場

地域の方が気軽に立ち寄れる居場所となることを目指して、「椎の実カフェ」を運営している。子育て中の母親、地域の方がリラックスできるプログラムを提供し、相互交流の機会を創出してきた。

4 事業内容

(1) 定員

子どもの居場所「しいのみハウス」の利用定員は、乳幼児から小中学生まで30名。家庭や自身に課題を抱えた子どもたちだけでなく、分け隔てない利用を促進することとして、一日平均15名の子どもの利用を見込んでいる。

(2) 開所時間

「しいのみハウス」の運営時間は、月～金までの週5日、14時から18時まで。

11時から14時までは、「椎の実カフェ」として、椎の実子供の家の親子ひろば参加者、地域の方々など、誰でも気軽に立ち寄れて、食事や交流を楽しむ憩いの場としている。

(3) 活動内容

ア 「しいのみハウス」の運営（14時～18時）

宿題、自習、木工体験、染め物体験、書道体験、農業体験、調理体験等の体験活動、読書や地域の方による読み聞かせ、天文教室、留学生による多文化紹介、手芸や工作、ボードゲーム、ごっこ遊び、人形遊び、大縄や卓球等の運動遊び体験の提供を行った。

イ 「椎の実カフェ」の運営（11時～14時）

子育て家庭の情報交換の場づくり、子育てママや地域の人向けのリラックスプログラム、リースづくり等のワークショップを開催した。

(4) 活動の成果

- ア 困難な背景を持つ児童の利用が日常的にあり、特に発達障害を抱える児童の利用の増加があった。それぞれの子どもや保護者が抱える困りごとに対し、スタッフが1対1の個別の対応に重きを置き、精神的なサポートを提供して信頼関係を構築することで、継続的な来所に繋がった。その結果、家庭や自身に課題を抱えた子どもたちにとって、分け隔てない居心地のよい居場所となった。また、児童本人だけでなく、家族に課題を抱える保護者の利用も増加し、各人が抱える困りごとを吐露し、多世代の相互交流を通して課題を解消していける場となった。
- イ 高齢者ボランティアとの遊びや体験活動などを通じて、子どもたち自身の人と関わる力や自己肯定感の高まりが認められた。また、大学生や留学生たちがメンターや良いロールモデルとなって、子どもたちの一歩先の将来の姿を体現することができた。
- ウ 子どもたちが「ジュニアボランティア」となって、自身のできる役割をもって企画運営に参画し、主体的に活動する数がこの1年で急増した。
- エ 子どもの好奇心や意欲を向上するような体験活動を子どもたちの意見を聞きながら日常的に計画し、実行した。農作業体験や駄菓子屋運営、ジュニアボランティア活動など、アクティブラーニングプログラムを実践したことによって、子ども自身の自己肯定感や自尊心の向上が見られた。
- オ 駄菓子屋や八百屋さん(農作業体験の一環で、収穫した野菜の販売体験)で行った活動をきっかけとして、保育園児親子の利用が増え、小学生と園児や保護者同士の交流が生まれた。また、小学生児童の保護者と卒園前の保育園児の保護者が交流を通して情報を交換し、不安を軽減させるなど精神的なサポートを担った。当居場所が幼保小の接続期を支えるとともに、保護者の憩いの場ともなった。